

令和4年度 日本精神科医学会学術教育研修会 報告

薬剤師部門

青木 治亮 坂本 隆行

昨年に引き続き日本精神科医学会学術教育研修会は、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、Zoomを用いて開催期間を1日として行っている。令和4年度の薬剤師部門は、「薬剤師が聴く話 薬剤師に効く話～用法（視聴後の業務への役立て方）・用量（視聴後に得られる知識）は貴方次第～」のテーマのもと、8月6日（土）に日精協会館（東京）から配信され、61名が受講した。

最初に、山崎学会長による「精神科医療の将来展望」と題して講演いただいた。精神保健福祉行政の歩みとして、ライシャワー事件、WHO クラーク勧告など、この50年の精神科医療の出来事や変化に続き、最新の精神保健福祉のデータ分析に基づいた話題提供・問題提起がなされた。また、精神科医療に対する問題点や将来ビジョンを踏まえた今後の方向性が示された。特にマスコミなどで言われている本邦での精神科病院についての統計や数字について誤解や過誤があり、その是正が必要であるとの意見を示して締めくくられた。

2 講義目は、医療法人微風会浜寺病院理事長・野木渡先生より「医師の立場から薬剤師に期待すること～薬剤師の養成及び資質向上等に関する検討会とりまとめを踏まえて～」と題して講演いただいた。先生は同検討会の構成員でもあり、検討会のとりのまとめ（今後の検討課題）について説明された。その中で、①薬剤師数は本当に余っているのか？ ②薬学部教育をどう考えるのか？ ③薬学部の入学者数・定員はどうすべきか？ ④薬剤師国家試験をどう考えるのか？ ⑤薬剤師の

地域偏在をどう考えるのか？ ⑥薬局への一極集中をどう考えるのか？ ⑦IT化が進歩する中、薬剤師の役割は？ という論点を挙げ、先生の私見や疑問点について話された。

ランチタイムセミナーを挟んで3講義目は、公財）住吉偕成会・精神科薬物療法サポートセンター長・吉尾隆先生により「薬剤師業務のデジタル化と精神科薬剤師業務の今後」と題して講演いただいた。前半は業務の電子化について、基礎となる電子カルテの位置付けから話題が始まった。次いで、処方箋の電子化の意義と必要性に触れられた。特に処方箋の電子化に伴う、服薬指導・おくすり手帳・地域との医療連携への展開とその可能性について強調された。後半は、デジタル化によって生まれるであろう時間の使い方について触れられた。特に、臨床の場面で難渋することが多い多剤併用の解消に、薬剤師が果たす役割について詳細に説明がなされた。

最後は「コロナ禍における精神科薬剤師業務の変化」をテーマにシンポジウムが行われ、シンポジストとして社会医療法人北斗会総薬局長・天正雅美先生、医療法人有恒会こだまホスピタル副薬剤部長・谷藤弘淳先生、昭和大学附属烏山病院薬局長・黒沢雅広先生、医療法人爽神堂七山病院薬剤課長・宮原佳希先生に講演いただいた。民間精神科病院における新型コロナウイルス感染症対策やその現状、大学における精神科臨床実習への影響について話され、その中で感染対策における精神科特有の問題や負担があるが、不慣れな感染対策への取り組みや患者への関わり方の重要性について触れられた。また、大学ではweb実習を行ったことでいっそう臨地実習の重要性が再認識させられたと話された。

講演終了後にはweb上で閉講式や受講生への受講証書の授与が行われ、研修会は無事終了した。

（日本精神科医学会

学術教育推進制度学術研修分科会）